幻想偽熊華説

蓮山

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは４人の存在が幻想郷を救う…かもしれない物語

注意。これは投稿者が友人にキャラを作ってもらいそれを出すという闇鍋のような作品です。なので投稿者もキャラをつかみきっておりません。それでもいいという方はゆっくりしていってね!!!

目次

人物設定 ―――――― 1
本編
第1話　偽物と熊公とハーフサキュバスと（元）男子高校生 ―――――― 7
第2話　春の宴とフォルスについて（上） ―――――― 13
第3話　春の宴とフォルスについて（中） ―――――― 18
第4話　春の宴とフォルスについて（下） ―――――― 23

人物設定

人物設定です。
ネタバレとかは消してますけど基本コピペです。

☆作者が作ったキャラ
名前：綺堂フォルス
読み方：きどうふぉるす
能力：捻じ曲げる程度の能力
概要：綺堂家という魔術の名家が造り出したホムンクルス。肉体は脆いが魔術により強化しているため身体能力は高め。だが幻想入りしたあと発現した能力によって肉体が脆いという事象をねじ曲げ健康的な身体を手にいれた。だがその維持のため全力は出せない。全力であれば運命すらねじ曲げる強力な能力。また、魔術に加え、魔法や妖術も扱えるようになった。ヴワル魔法図書館の常連でパチュリーと仲がいい。容姿は白髪に青い目。身長は１６１㎝。体重４９kgと全体的に儚い印象を受ける。
☆友人の通称「魔王」が作ったキャラ

名前：久万　慶篤／くま　よしあつ
身長：１７８ｃｍ
体重：９７ｋｇ
髪の色：スキンヘッドのため不明
目の色：銀灰
種族：純度百％の人間
友好：害を及ぼさない限りはなにもしない

さて、ここからその他の情報

元力士。相撲界では名の知れた存在であったが、酔っぱらい運転の車に轢かれてしまい右足が使い物にならなくなったためになくなく現役を引退。その後は後援会の会長の秘書（とは名ばかりの用心棒）になる。そもそもこの後援会自体がやのつく人の経営する会社だった（会社自体はかなりホワイト企業）ために数々の裏社会の構想に巻き込まれるがパワーと耐久力がバカみたいにあったためにほぼ無傷で生き延びていた。しかし、ライバル企業に毒を盛られ、あえなく死亡。本人の意思により無縁塚に埋葬されることになった。会長等が墓参りに来ていたが、次第に誰も来なくなり、ついには開発のために無縁塚自体が取り壊され、幻想入りしたと本人は語っている。

現在では仕事しない門番の代わりなおかつ雑用として紅魔館に住み着いている。

一応あらゆる物理攻撃、魔法攻撃に対して耐性があるが、本人は弾幕とかめんどいと話し、生身でなんとかなると思っていたりする。実際問題なんとかなっている。
料理が得意。畑をたがやし、狩りに出掛け、魚を釣り、わりと幻想郷を楽しんでいる。
一応和洋中何でもござれの本格派。力士時代の経験が役に立ったようだ。
パワーについてだが鬼よりも遥かに強い。
見た目は完全にヤクザ。銀縁のメガネはもう十年以上共に過ごしたものだという。
性格は温厚ではあるが、キレやすい。キレたらろくでもないことになる。という問題児。
武器は使わない。以前使ったこともあるが、武器の方が基本壊れる。
鈍足なおかつ飛べない。遠距離攻撃もできないため、基本置き盾。ただし、ものを投げればコントロールはかなり悪いが攻撃にはなる。
カレンとは何らかの関連性がある模様。
噂だとかなり頭がいいだとかなんだとか。
☆友人の通称「ロリコン」が作ったキャラ
結月カレン
名前漢字表記：華恋
読み：ゆづきかれん

種族：淫魔と吸血鬼と人間の混血
二つ名：性欲の隠者
人間友好度：極高
危険度：低
程度の能力：ありとあらゆる淫魔になる程度の能力
性別：女性（基本的に）
一人称：私。
二人称：貴方、（呼び捨て）
三人称：彼、彼女
年齢：永遠の１７歳
身長：１５７
体重：???
ＢＷＨ：７８／６８／８６
好き：いい男や可愛い女の子とやること、コスプレ、お出かけ。
嫌い：精の薄いやつ、権力
人物
艶やかな白色の腰まである長い髪、雪をも汚す白い肌に、闇を詰め込んだような右目、

エメラルドのような左目を持つ。
体型は好きなように変えれるが、特に変える必要が無い時は本来の姿である痩せ型、キュッキュッボンである。
人里から少し離れた所に洋館を立てて住んでおり、そこに迷い込んだものの精や性欲を食べている。
人間が食べるようなものをでも食欲は満たされるため、あくまでも精や性欲はデザート。
人懐っこく明るい性格、人間も妖怪も大好きで性欲と食欲が強い。
何故か外の文化、主に日本の萌文化やコスプレなどを知っているところから外の世界出身だと思われる。
母親は淫魔、父親は人間と吸血鬼のハーフであることから、7割淫魔、二割吸血鬼、1割が人間、という感じである。
故に吸血鬼としての基本能力も兼ね備えている。
尚、守備範囲は老人以外なら大丈夫と言っており、特に好みは見た目10代の少女が好物である。膨らみ掛けの胸は私達の夢だ！
戦闘方法
直接的な戦闘能力は鉈と鎌を使っての戦闘なのだが、正直得意じゃない。

弾幕勝負も苦手で、精神系魔法や幻覚系の魔法が得意でそれらを使っての戦闘を行う。

☆友人の通称「染まりかけ」が作ったキャラ

名前　先谷　説　（さきたに　せつ）

身長／体重　１６９ｃｍ／５６ｋｇ

種族　黒髪黒目の日本人

性格　基本的に楽観主義者

一人称　俺

二人称　初対面の人には君、あんた。それなりに親しい人にはお前。

その他設定

平凡な高校生だったが、ある日突然車に跳ねられ死亡。次に目が覚めたら幻想郷にいた。その後、野良妖精や妖怪に襲われ、逃げ惑うなか、命からがら博麗神社に到着。霊夢にこの世界の文化レベルや周辺の地理を教えてもらい、人里へ出向く。そこからはバイトなどをして過ごす。家もないため、博麗神社に居候している。

本編

第1話　偽物と熊公とハーフサキュバスと(元)男子高校生

ここは幻想郷。外の世界で忘れ去られた者たちがたどり着く最後の楽園。
この幻想郷には3人の強者と1人の可能性があった。

〜〜紅魔館〜〜

「また来たぞー。熊公」
「おう、また来たのか。おら、通れ通れ。パチュリー様はいつも通り図書館に引きこもってるぞ。」
「そうか、ありがとな」
フレンドリーに厳のような男に華奢な少年が話しかける。
男の名前は久万慶篤(くまよしあつ)。
人間でありながら鬼をも超える力を持つ異常な強者だ。

少年の名は綺堂（きどう）フォルス。
人間ではなくホムンクルスであり、強力な能力に目覚めている。
２人はほぼ同時期に幻想入りしたという縁で仲が良くなった。強さはどちらも土俵が違うのでどちらが強いかはわからないが、幻想郷屈指の強さを誇ることは確かだ。
「じゃ、またな」
「ああ」

～～人里～～
「女将さーん。ぜんざい一つ～」
そう言うのは退廃的な美しさを持つ少女だ。
彼女の名は結月カレン。
淫魔と吸血鬼と人間の混血であり、魔法において魔女たちと同格か、それ以上とまで謳われる。
人間に極めて友好的であり有事の際は率先して人里を守護するため、見た目と相まって人里でも人気が高い。
「んん～。美味し～」

〜〜博麗神社〜〜

「霊夢〜昼飯できたぞ〜。ここに置いとくからな。じゃあ行ってくる」

「は〜い。今日は…アユの塩焼きね。…いただきます」

少女に声をかけてから人里の方へ向かった少年は先谷（さきたに）説（せつ）。

博麗神社に居候しながら人里でバイトをする無能力者。

比較的物怖じしない性格が幸いしたのか、幻想郷の名だたる実力者たちと友好的な関係を結んでおり最近は強くなるために魔法や霊術を学んでいる。

〜〜紅魔館〜〜

「よっす。パチュリー。」

「こんにちは、フォルス。あなたが探していた本はＦＤの５８番あたりにあったわよ。」

「あ〜そこだったか。ＦＣの５１番あたりだと思ったんだが…」

「多分、魔理沙さんが返すのを忘れて慌てて入れたから場所が変わっていたんですよ」

「よお、こあちゃん。魔理沙かよまた…。またシメなきゃだめか？本は元あった場所に戻す。常識だろうに」

魔理沙〈ブェックシッ…なんだぁ、誰か噂してんのか？

（魔理沙にとって）不穏な話をしている中、不意に

ドガアアアアアアアアアアアアアン

と、爆音が響いてきた。

「そういや食後の運動の時間か…熊公もよくやるよ」

「彼はなんだかんだで身内に甘いもの…フランにおねだりされたら断らないでしょうね」

轟音が聞こえているというのに世間話をするようにパチュリーとフォルスは会話を続ける。

それはここではいたって普通の日常であることの証左。そもそも、魔法で守られている図書館では何の危険もないため現実味が少々薄いというのもあるが。

「俺も参加しようかな…」

ぽつりと、フォルスがつぶやいた。

「あなた…本当に変わったわね…幻想郷の一部の人に毒されたのかしら…」

「だ、だめですよぉ。もし何かの間違いで妹様が来たら私を守れる人が居なくなるじゃないですか！」

フォルスはそのセリフを聞いて目頭を押さえた。まるで頭痛をこらえるように。いや実際そうなのだ。

「こ～あ～？」

「ひぇぇぇぇ!?たっ、助けてくださいぃぃ。」
パチュリーが怒るのも仕方のないことだ。何せ自分の一番自信がある特技が「何かの間違い」で破られるのではと言われたのだ。
「フォ、フォルス様〜、助けてください！」
「あ〜、なんだ。合掌。」
「目をそらさないでくださいぃぃぃ。パ、パチュリー様、許してもらえたり…？」
「しないわ。」
フォルスは去った。
（面倒ごとは嫌だし、帰る。すまない、こあ。君の勇姿は忘れない。）
〈パチュリー様ぁ!?その魔法拳は何ですか!?
〈大丈夫。ちょっと燃えるだけだから
〈全然大丈夫じゃないですよねぇ!?って熱いです！近づけないでくださいぃぃ！
〈むっきゅっ！
〈アーっ！
安らかに眠れ

〜〜人里〜〜

「あら？説じゃない。久しぶりね」
「お久しぶりっす、カレンさん。今日は何の用で？」
「スイーツを食べにね～。あそこのぜんざい美味しかったわ。今日もバイト？頑張るわね～」
「ええまあ。霊夢に恩を少しでも返せればと。」
「健気ね～。だからこそ好感が持てるのだけど。仕事、頑張りなさい」
「うす。それでは」
　その時、説とカレンの足元に振動が走る。
「またあの二人ですか…」
　そうつぶやく説の頭には厳のような男と金髪の少女が浮かんだ。
「考えないほうがいいわ。まだ慣れていないようだけど必ず慣れるわ」
　そういうカレンの顔は少し陰っているように見えた。
「……うっす…」
　長い間をおいて説が首肯する。
　そして、心なし疲れた表情でバイト先は向かうのであった。

第2話　春の宴とフォルスについて（上）

季節は春。

幻想郷では毎年恒例のあれが開催を間近に控え、その準備であわただしく動く者が多くなっていた。

あれとはつまり、

花見である

毎年、白玉楼で開催される花見は様々な勢力の交流の支えとなっているため妖怪の賢者などの上位陣は根回しや予想される面倒ごとなどの対処をどうするか決めていたりと意外に多忙であった。

しかしそんなことなどどうでもいい奴らはどの世界にも、さらにここは幻想郷なので著しいほど多くいるため頭を痛くする問題であった。

しかし、妖怪の賢者のもとに一人の少年が来たことによって3年前から問題は少なくなっていった。

少年の名前は綺堂フォルス。強力な能力によって場合によっては世界すらねじ伏せる幻想郷屈指の強者である。

～～ｓｉｄｅ紅魔館～～

「こんなもんでいいか。おい、咲夜、美鈴。味見してくれ。」

熊がごとき男、久万の前には山菜を中心としたてんぷらが並んでいた。

これはすべて久万が揚げたものである。なんでも自炊生活が長かったらしく和洋に中華と何でもございだそうだ。

「んっ。美味しいわね。和食に関しては完全に負けているわ…」

「ん～。美味しいですねぇ。料亭開けるんじゃないですか？」

そのてんぷらを試食しているのは２人の美女。

方や銀髪のメイド服を着た鋭利な刃物を連想させる目をした少女。

十六夜咲夜である。

実は霊夢や魔理沙よりも年下で１５歳なのだという。

方や鮮やかな赤の髪をした中華服姿の黙っていればクール系美女だがその口調のせいか親しみやすさを感じる美女。

紅美鈴である。

実は弾幕戦闘は苦手だが殴り合いなら鬼以上の実力を持つ。

「そうか。そりゃあよかった。」

「あ、久万さん。お嬢様がお呼びでしたよ。」

「うん？そうか、わかった。ひと段落ついたし行ってくるわ」
「行ってらっしゃい久万さん。ごちそうさまでした。」
久万は１０分ほどかけてレミリアのところまできた。
それだけ時間がかかったのは紅魔館が空間魔法によって拡張されているからだ。
「それでお嬢？何の用で？」
口調と見た目が合わさり完全に８９３である。
「え、ええ。明後日に白玉楼で花見があるじゃない？」
「ええまあ。そのために料理を決めてるんですし。それで花見の席で何をしろと？」
「一種の示威行為ね。あなたの力を…そうね。西行妖にぶっけてもらうわ。質問はあるかしら？」
「具体的にはどうぶつけるんで？引っこ抜けとかは難しいですよ。」
「あなた、確か力士だったわよね？だったら『ツッパリ』というのをしてほしいの」
「…いいでしょう。幻想郷の大横綱の二つ名が伊達ではないことを証明してやりますよ。」
わずかな逡巡の後に了解する。おそらく心のどこかでは自分の限界を知りたい気持ちがあったのだろう。
～～ｓｉｄｅ博麗神社～～

妖怪神社とまで揶揄される博麗神社に二人の来客があった。
「明後日の花見はどうするのぜ？霊夢？」
「別に、いつも道理お酒飲んで食べて寝るわ」
「説君の膝枕で？」
「ち、ちがうわよ。普通に寝るわ」
「普通に膝枕で寝るのぜ？」
「そうね…って違うわよ！」
「え～本当に～？」ニヤニヤ
「違うのか～」２８２８
「ちがうっていってるでしょ！」
ウガーッと霊夢がカレンと魔理沙を追いかける。
ツンデ霊夢こそ至高ッ!!
説は知らないが説にあってから霊夢は変わった。
しかしそれは別の話で語ろう。
魔理沙はこの変化を友人として喜ばしいものとした。
カレンはただ単に「ツンデレっ娘萌えるわー」という理由だが
～～ｓｉｄｅｏｕｔ～～

春の宴の幕が上がる

〜〜おまけ〜〜

そのころの説

「へくしっ」

「どうした説？風邪でも引いたか？」

「あ〜大丈夫っす。どうせ誰かが噂してるんでしょう。心配してくれてありがとうございます、おやっさん」

幻想郷は今日もヘイワダナー

第３話　春の宴とフォルスについて（中）

きっと俺という存在はこの地に災厄を呼ぶ。それでもいいのか？
少年は金髪の女性に尋ねた。
それでもいいのですわ。
女は笑う。そんなことが起きても彼女がどうにかするからと。
…信頼されているんだな…博麗の巫女というのは
少年もつられて笑う。
これはまだ『綺堂フォルス』がまだ『綺堂[redacted]』であった頃の、妖怪の賢者との会話だ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「………きて………きて〜…起きて〜」
まどろみの中、フォルスの意識に響く声。
「んン…まだ少し…」
「そういって３０分前にも寝ましたよね…」
フォルスとて、お布団には勝てない。

「む～。なら強制的に起こします！」
「え、ちょ」
フシャー！と少女が声を出しながらフォルスの顔をひっかく。
「いっっっっっっったあああああああああああ!?」
「だから起きればいいんですよ？」
「お前なぁ。さすがにイテェよ、橙（ちえん）」
少女―橙はジト目でフォルスを見る。
「だったらその二度寝の癖を直してください！」
「ぐうの音も出ねぇ…まぁいいや、おはよう」
「はい！おはようございます！」
元気に挨拶をする橙。
「朝食食べたら…そうだな、暇だし遊ぶか？」
「本当ですか！」
橙の目がキラキラとする。なんだかその様子がほほえましく感じて思わずフォルスは頭を撫でた。
「にゃ～」
「猫みたいでかわいいなぁ」

あごの下辺りも撫でる。橙のしっぽが地味にフォルスの足に巻き付いているのも仕方ない、橙にとってフォルスに撫でられるのは心地よいのだ。

朝食後、フォルスと橙は用事がてら、寺小屋に来ていた。

「友達誘って来いよ？俺は紫さんから頼まれた招待状を慧音先生に渡してくるから」

招待状の入った便箋をひらひらさせながら橙に言う。

「わかりました！」

敬礼しながら走って去る橙を見送り、フォルスは寺小屋の教員室に向かう。

「おっ、説じゃん。今日はここでバイトか」

「あ、フォルスさん。今日は備品を届けに来ただけで別のところです」

「問屋のバイトか。つかいつも言ってるけど別にタメ口でいいぞ？年齢的にはそんなに変わらないだろうし」

説の年齢は１８歳。フォルスの年齢は１９歳。そこまで変わらないためタメ口でも問題はない。しかし、そういうしゃべり方をしていたせいか大抵の人や妖怪に対しては敬語で接してしまうようだ。

「そういえば、フォルスさんは何の用で？」

「俺は、ほら明後日に春の宴があるだろ？それの招待状を慧音先生に渡しにな。お前も参加するんだろ？熊公も料理するらしいぞ」

「デジマ!?久万さんの料理ってうまいんすよねぇ」
　みんな一回は久万の料理を食べたことがあるが本人は特別な時くらいにしか作らないのでみんな楽しみなのだ。
「ま、楽しみにしとけ」
　慧音に招待状を渡してから橙の友人（チルノやルーミアなど）と遊び、帰った後
「で、今回は妨害はありそうなのか？」
　紫とフォルスは深夜に遊戯王をしながら話し込んでいた。
「残念ながら、ね。スリーバーストショット・ドラゴンで攻撃。その伏せカードにするわ」
「はぁ、面倒な…。あ、リバース。エルガウストの効果、攻撃力0な。」
　重要な話だが毎回のことなので仕方ない。それに、フォルスの能力はすさまじいためそんな楽観視をしても問題ない。
「どうせいつもどうり『待遇改善を！』って言うんでしょうね…。トラップ、ゼロデイでスリバ破壊。エルガウストとサブテラーマリスの妖魔、シャンバラ破壊ね」
「どこの世界にもいるよな、そういうやつ。星遺物の傀儡でアルラボーンリバース。シャンバラ以外破壊無効。つかスリバの効果で無効化すれば…」
「あっ」

「あるあるだよな…。あ、星鎧を効果で特殊召喚」
「くぅっ…。まぁ生物である以上誰かより上になりたいと思うのは普通でしょうけど。ターンエンド」
「何だっけ。幸福とは目の先のニンジンのようなものである、だっけ？そんな奴らの言うこと全部聞いてたらシステムが破綻するから聞く必要があるか判断しなきゃいけないんだろ？お疲れ様。ドロー。星遺物に差す影発動。サブテラーの妖魔召喚。効果でエルガウストを裏側に。墓地からリグリアード、裏で。傀儡でリグリアードリバース」
「えげつないんだけど…」
　そういうデッキだから仕方ない
「ゲートウェイ除外」
「サレンダーで…」
　ゆかりんはヴァレットデッキだったがさすがに今回は回ったフォルスの勝ちであった。
「明後日、いやもう明日の準備するために寝るわ…おやすみ」
「ええ、おやすみ」

第４話　春の宴とフォルスについて（下）

こんな不良品は、いらないよ
―それはてめえの都合だろ？
ご主人様に逆らうようなホムンクルスは失敗作だ
―てめえが勝手に決めるな、俺の価値を
こんなものなら殺すべきだ
―ああそうかい、なら殺されても文句はねえだろ？
馬鹿な!?こんな強くした覚えは
―それは俺が力を求めたからだ。俺が強くなろうとてめえらが居ない隙に鍛えたんだ
貴様！絶対殺す！絶対にだ！『物』が持ち主に逆らってはいけないんだ！
―ハンッ。『俺』が『物』だって？『物』に意志は、自我は宿らねえよ。宿るとしたらそれは、『化け物』か『人』しかないんだ
～～～～～～～～～
「夢、か」

フォルスは朝日によって目覚めた。寝起きには少々眩しすぎるが目は冴えた。
「久しぶりに、見たな。いまだに気がかりなんかねえ？もう3年経ったんだがあいつらは来てないからもう来ないだろうに」
階段を下りながら朝食を取りに行く。起きてからほとんど夢の内容しか考えてなかっただろう。フォルスの顔面に柔らかい感触と甘いが落ち着くにおいが広がった。
「ぬお」
「む？フォルスか。どうした？甘えたくなったか？いつでも胸でもしっぽでも貸してやるぞ」
フォルスの目の前には藍色の前掛けのついた導師服を着た金色の髪と尻尾を持った狐人のような絶世の美女といってもいい女性がいた。
彼女の名前は「八雲（やくも）藍（らん）」。紫の式神でぐうたらな紫に代わり幻想郷の実質的な管理を任されている女傑だ。
「いや、いい。すまん、考え事してた。変な夢というか気になる夢を見てな」
「むう、そうか」
少し、いや、かなり残念そうにフォルスを見つめる藍。
「今日は宴だろ？そっちの準備はどうだ？」
露骨に話題をそらしたフォルスであったが、確かに気になるところであった。

「それに関しては問題ない。様々なところから料理のために人を雇ったし、警備はお前がいるから大丈夫だろう。いざとなったら宴の参加者も出るだろうしな」
「そうか、それはよかった。3年前は悲惨だったからな」
わずかながら苦笑する二人。3年前の宴ではいろいろあったのだ。秩父、もとい一部の妖怪が幻想郷を支配しようと大挙して襲い掛かったりそれに反撃した結果死者が出たり。事後処理が大変だったのだ。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「それでは皆様!!!コップをもって！」
「「「カンパーイ!!!!!」」」
白玉楼にて宴が始まった。参加者はいろんなところからきているため毎年100名を超える。中には異変を起こして退治された者もいるし退治したものもいる。ここは幻想郷。どんな奴でもある程度の許容範囲を越えなければ受け入れる、とても懐が広い残酷な場所なのだ。
「いやあ、今年はそこまでゴミが出なくて助かるな」
「ああ、ゴミがな。どうせ出てくるだろうが対処は任せた」
「いや、怖えよお前ら」
藍とフォルスの会話に思わずといった感じで魔理沙が突っ込む。何が起きるのかは

この常連なため、知っているのだろう。まあ隣で半殺しにはするということを言ってる者が居たら怖くて思わず突っ込むのは仕方ないだろうが。

「さすがに命は奪わねえよ。最初は元日本人らしく警告はする。平和主義者というか平和ボケした国らしく、な」

「つまり警告無視したら攻撃するってことだよな…」

「そんな国って大丈夫なのか？暴力に訴えないのはいいことだが力でしか解決できないことだってあるだろう？」

　日本人らしい対処をするとフォルスが伝えると日本そのものが心配される始末。そもそも幻想郷の奴らが血気盛んだから暴力で解決することが多いからそんな結論が出てくるのだが。

「意外とどうにかなってるんだよなあ、これが」

「お、熊公。呑んでるな。だいぶ酒臭いぞ」

「そらそうだ。呑める時に呑まなきゃな、しかもただ酒なんだぞ」

　そこに久万が歩いてくる。もうすでにほろ酔いのようだ。わずかに顔が赤い。

　近くにあった椅子に座り、話を続ける。

「あの国が生き残ってるのはアメリカっつー巨大な国がバックについてるからだ。確かに日本は国としての暴力は禁じてる。そんな状態では絶対他国に侵略されるが後ろに

でかい国がついてるなら話は別だ。手出ししたら自分より強い国が攻めてくる、だから攻めない。つまり国単位で依存してるんだ」
「戦争で国力差が１０倍近いところに挑んだ狂犬みたいな国だったからなあ。下手に武力持たせて自分たちに挑戦されるよりかは、牙を折って自分たちで管理したほうがよかったんだろ。なのにさあ、どうしてこう、国を守るために必要なのに兵器を買うのに反対する奴らが沸くんかねえ？平和のためには不必要だって言ってるやつらはそれがどこにとって利益があるか考えてないのかなあ？」
「何かお前ら酒のせいか話がおかしくなってない話が逸れまくってるぞ」
　こんな話をしていると、四人のもとに赤い一本の立派な角を持った女性が向かってきた。
「よう！呑んでるかい？聞くまでもないけどな！アッハッハッハ」
「呑んでるぞ～勇儀。警備に支障がない程度だけどな」
「フォルスだけ飲む量が少ないと思ってたらそういえばお前は会場警備だったな」
「今のところは全然来てないけどな…嵐の前の静けさだったりするんだけどな、たいていの場合」
　星熊勇儀。それが彼女の名前だ。山の四天王とまで呼ばれる鬼の中でもトップクラスの力を誇る実力者だ。ちなみに、久万とほぼ力は同じだがこれは久万が異常なだけで

あって非力なわけではない。
「ちょっと紫さんのところに行ってくる。まだ結界には反応はないが一応見てくるために外に出させてもらう」
「おう、行ってこい」
　しっかりとした足取りで紫のところへ向かうフォルス。
　しかし
「うん？この反応は…餓鬼か…。ほかにも獣タイプの妖怪か…獣系は本能に忠実すぎるんだよなあ。とりあえず報告っと…。フラグ立ててたか…」
　空間を捻じ曲げて一気に加速する。その際、周りのものを吹き飛ばさないように自身の周りの空間も捻じ曲げておく。幻想郷で加速に関していえばフォルスが一番早い。つまり短距離であれば最速ということになる。
「紫、来たみたいだ」
「こっちでも確認したわ。総数２３０程度」
「そんくらいなら余裕だな。殺しても？」
「いいわ。もともとの数が多いから１０００体程度なら殺しても問題ないもの」
　元日本人らしくない考え方だがここでは正しい。さすがに無傷で２００を超す敵は捕らえられないし、そもそも捕らえるのには向いてない能力だ。殺傷能力と汎用性には

富んでいるが、捕縛一方面に関しては非常に向いてない。
「行ってくる」
「はーい」
コンビニに行くような気やすさで敵の前に送ってもらう。これは実力を知っていなければできないだろう。
「さあて。殺りますか」
まずは正面の6体の餓鬼の体をねじ切る。そのあとは地面ごと捻じ曲げて後続の1
3体の餓鬼を埋めて殺す。狼型の妖怪が一瞬で距離を詰めてきたが
「フレア」
パチュリーに教えてもらった炎魔法で焼き殺す。
「おい、てめえら。今ここで立ち去るならこいつらだけで勘弁してやる。もし向かってくるならこいつらと同じ運命をたどることになる」
圧倒的な力を見せてからの警告。こっちのほうがこの世界では通用する。
一匹の餓鬼が襲うが、首をねじ切られて殺される。そんな光景を見せた瞬間に三匹の山猫型の妖怪が逃げ出し、それを皮切りにどんどん逃げていきついにフォルス以外居なくなった。
「妥当な判断だな。帰るか」

「ただいま」
「おかえりなさい。早かったわね」
「お疲れ様です」
　フォルスを迎えたのはカレンと説だった。
「いつも通りちょっと脅したら帰ってったよ」
「そりゃそうでしょ…あんな殺すことに関しては化け物みたいに強い能力を目の当りにしたら戦意なんて消えるわよ…」
「アハハ…。死体なんてトラウマものですもんね…。初めて見たときは吐きましたし」
　と、そこで気になった。
「なあ、熊公は何しようとしてんだ？西行妖の前で力を溜めてるような感じなんだけど…」
「ああ、あれっすか？レミリアさんにツッパリを見せてほしいってせがまれたらしくて」
「え、ちょ。それはやばい」
「え？なんでよ」
（紫に聞いたことがある。幽々子様の体によってあの桜は力が封印されてるって。封印が解けたら魂が吸われてみんな死ぬ…!!）
「スゥーーッ……」

「おお!?待て待て待て！って聞こえてねえ！だめだこいつ集中しすぎ！」
「ど、どうにかするわ。能力使えばどうにでもできる…はずよ。」
地味に命の危機なために焦る二人。
そしてついに
「オッツッラア！」
ズドンッ
西行妖に渾身の一撃が当たり、周囲のものは砕け、振動がかなりの広範囲にまで広がり、そして
西行妖が傾き始め、そのままある程度まで斜めになった後、引っこ抜けずに元の位置に戻った。
「「ふうーーーっ」」
２人して冷や汗をかいた。事実を知ってるとかなり怖かったが知らない者たちにとっては久万の強さを体感するイベントでしかなかった。
「何か…疲れた」
「私もよ…」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
その後、久万は紫とフォルスに説明されながら説教され事前に相談すればよかったと

思うのであった。